

不定名詞句を主語とする倒置指定文について*

熊本 千明

Inverted Specificational Sentences with Indefinite Subjects

Chiaki KUMAMOTO

要 旨

英語の倒置指定文¹は、変項を埋める値を指定するという意味機能をもつコピュラ文であり、主語位置の名詞句は非指示的な「変項名詞句」(西山 1988、2003、2013) であると考ええることによって、その特性を説明することができる。この「変項名詞句」の概念を活用せず、英語の倒置指定文は等価文(同一性文)の一種であるとする考え方(Heycock and Kroch 1999、Heller 2010、他)、あるいは、措定文の倒置形であるとする考え方(Moro 1997、Mikkelsen 2005、Patten 2012)が、しばしば提示されてきたが、いずれも、コピュラ文の文タイプ間の区別を不明確にしてしまうという問題を抱える²(熊本 2014)。本稿は、特に、後者の考え方の問題点を検討するために、倒置指定文と措定文の文体的倒置を比較し、両者の相違を明らかにする試みである。叙述名詞句と変項名詞句の特性の違いは、意味的、統語的にどのような観点から示すことができるであろうか。変項を含む open proposition(以下 OP)(Prince 1986)の関与は、指定の機能をもつ WH 分裂文、it 分裂文ばかりでなく、話題化、焦点前置などの焦点化構文や、様々な倒置構文についても論じられ、いずれの場合も、強勢が置かれた要素が、前提となる OP に現れる変項の例示を行うといわれる。この OP の変項の例示という機能と、変項名詞句の値の指定という機能との間には、どのような類似点、相違点があるものであろうか。これらの問いに対する答えを探ると同時に、名詞句の意味機能を考慮せず、情報構造上の特徴のみを手掛かりとしてコピュラ文の意味構造を探ろうとする分析法の不備を指摘する。

【キーワード】(倒置) 指定文、措定文の倒置形、叙述名詞句、変項名詞句、情報構造

I. 序

ここでは、西山(2003)の次の規定に基づいて、考察を行うこととする。

(1) 措定文: A で指示される指示対象について、B で表示する属性を帰す。

(西山 2003: 123)

例: John is a student.

指示的名詞句

叙述名詞句

- (2) 倒置指定文: A という 1 項述語を満足する値を探し、それを B によって指定 (specify) する。 (西山 2003: 135)

例: Smith's murderer is John.

変項名詞句 [x is Smith's murderer]

指示的名詞句

それぞれの文タイプの例を以下に挙げておこう。

- (3) a. John is the president of the company. (措定文)

b. ジョンはその会社の社長だ。

- (4) a. JOHN is the president of the company. / The president of the company is JOHN. (指定文 / 倒置指定文)

b. ジョンがその会社の社長だ。 / その会社の社長はジョンだ。

変項名詞句は命題関数 [...x...] を表わす 1 項述語であり、叙述名詞句も同様に 1 項述語であるが、両者の意味機能は大きく異なっている。また、上で見た名詞句 *the president of the company* のように、同じ名詞句が叙述名詞句としても変項名詞句として用いられることがあるとしても、両者の分布は同一ではない。西山 (2003) は、次の例を挙げて、変項名詞句として用いられる名詞句が、必ずしも叙述名詞句として用いられるわけではないことを示す。

- (5) 漏電がこの火事の原因だ。 / この火事の原因は漏電だ。

- (6) ?漏電はこの火事の原因だ。

(西山 2003: 140)

(5) の文は、それぞれ指定文 / 倒置指定文であり、その下線部は変項名詞句である。もし、「この火事の原因」という表現が対象の属性を表す叙述名詞句として用いることができるのであれば、措定文を作ることが可能なはずである。しかしながら、(6) は意味的に適格な文ではない。また、叙述名詞句と変項名詞句には、疑問化が可能かどうかという点においても違いがあることを、西山 (2003) は指摘している。

- (7) a. あのひとは、学生だ。

b. あのひとは、どんなひとか。

- (8) a. あのひとが、委員長だ。

b. ?あのひとが、何であるか。

- (9) a. 委員長は、あのひとだ。

b. ?何は、あのひとであるか。

(西山 2003: 141)

(7) が示すように、措定文の叙述名詞句は、疑問詞で置き換えることができる。他方、(8)、(9) に見られるように、指定文、倒置指定文の変項名詞句は、疑問詞で置き換えることができない。指定文、倒置指定文が変項を埋める値を指定する文であることを考えれば、

(10a)、(10b) のように、指定されるべき値を問うことはできても、(8b)、(9b) のように、埋められる方の変項を問うのは不自然であることが理解できる。

(10) a. 誰が、委員長であるか。(指定文)

b. 委員長は、誰であるか。(倒置指定文) (西山 2003: 141)

このような相違があるにもかかわらず、変項名詞句と叙述名詞句を明確に区別しない議論がしばしば行われる。特に、英語のコピュラ文に関する論考においては、日本語の助詞「が」「は」に対応する標識がないために、実際、そのコピュラ文が指定文として用いられているのか、(倒置) 指定文として用いられているのかが示されないまま、議論が進められることがある。変項名詞句と叙述名詞句の違いを明らかにせず、名詞句の非指示性のみに注目して、倒置指定文は指定文の倒置形であるとする立場の問題点を、以下において検討する。

II. コピュラ文の主語位置に現れる非指示的名詞句

倒置指定文を指定文の倒置形として分析する議論の根拠は、文頭の名詞句が非指示的であり、コピュラの後に現れる要素が焦点となっているという点である。この節では、倒置指定文と指定文の倒置形、それぞれの文頭に現れる名詞句の特性を考えてみることにしよう。

まず、Mikkelsen (2005) は、倒置指定文の主語名詞句が指定文の主語名詞句とは意味的に異なるタイプのものであることを、容認される代名詞の違いによって示す。

(11) Q: What nationality is Molly?

A: {She / *It / *That}'s Swedish.

(12) Q.: Who is the tallest girl in the class?

A: {That / It}'s Molly. (Mikkelsen 2005: 64-65)

(11) の指定文の主語名詞句は、世界の中の対象を指示する指示的名詞句であり、代名詞化するには、*she* が用いられる。これに対し、(12) の倒置指定文の主語名詞句の代名詞化は、*it*、*that* を用いて行われる。この *it* や *that* は、(13)-(15) が示すように、性質を表示するのに用いられるものである。

(13) He is a fool, although he doesn't look {it/*him}. (Mikkelsen 2005: 65)

(14) LBJ is the President of the United States. He has been {it / *him} since 1963.
(Mikkelsen 2005: 65)

(15) They say that Sheila was [beautiful] and she is that. (Mikkelsen 2005: 68)

そこで、倒置指定文の主語名詞句は、指示的名詞句ではなく、性質を表す叙述名詞句であると、Mikkelsen は考える。

倒置指定文の主語名詞句が非指示的であるという点に気づいたのは良いとしても、変項名詞句を叙述名詞句から区別しないために、Mikkelsen は、(16) の A2 が実は指定文であることを見逃してしまう。Mikkelsen は、彼女の考える「叙述名詞句」が主語の位置に現れた A1 の語順をもつものだけを *specificational* と呼び、指示的名詞句が主語の位置に現れた A2 の語順をもつものは *predicational* に分類していることに注意しよう。

(16) Q: Who is the winner?

A1: The winner is JOHN. (*specificational*)

A2: JOHN is the winner. (*predicational*) (Mikkelsen 2005: 160)

同様に倒置指定文を措定文と関連づける分析を行う Patten (2012) にとっても語順は重要であり、主語名詞句が非指示的名詞句である (17a) は指定の解釈、主語名詞句が指示的名詞句である (17b) は措定の解釈をもつと考える。

(17) a. The thoracic surgeon is John McIntyre.

b. John McIntyre is the thoracic surgeon. (Patten 2012: 38)

しかしながら、また、Patten は、(17b) の *John McIntyre* に焦点が当てられた場合には、指定の解釈も可能であるという指摘を行っている。Patten の議論については、熊本 (2014) で詳しく論じたので、ここではくり返さないが、たとえ *John* に焦点が当てられたとしても、叙述名詞句が不定名詞句である (18) は指定の解釈をもち得ない、と Patten が述べていることにふれておこう。

(18) JOHN is a surgeon. (*predicational*)

(19) JOHN is the best surgeon. (*specificational*) (Patten 2012: 34-35)

Patten にとって、指定というのは、限定的な集合の全メンバーを列挙するという機能である。(18) では、不定名詞句 *a surgeon* は非限定的な集合を示し、主語名詞句の指示対象はメンバーの一部を挙げているだけなので、指定の機能を果たすことができないと考えるのである。

さて、このように倒置指定文を措定文の倒置形とみなす分析に対して、Heycock and Kroch (以下 H and K) (1999) は、倒置指定文を等価文 (同一性文) と考える立場から批判を加える。倒置指定文の主語名詞句は叙述名詞句であり、不定名詞句は叙述名詞句として機能しうるのであるならば、なぜ、不定名詞句は倒置指定文の主語の位置において許容されないのだろうか。

(20) a. John is a doctor.

b. *A doctor is John. (H and K 1999: 379)

(21) a. ジョンは医者だ。

b. *医者がジョンだ。

これに対し、Mikkelsen は、(20b) のような例は非文法的なのではなく、どのような文脈の下でも「不適切」(infelicitous) になるだけであると主張する。不定名詞句も倒置指定文の主語の位置に現われうるとして、Mikkelsen は以下の例を挙げる。

(22) *A philosopher who seems to share the Kiparskys' intuitions on some factive predicates is*
Unger (1972), who argues that [...]. (Mikkelsen 2005: 117)

(23) *Another doctor who might be able to help you is Harry Barcan.* (Mikkelsen 2005: 118)

(22)、(23) と (20b) の違いは、主語の位置の不定名詞句が Discourse-old である要素を含んでいるか否か、という点にある。倒置というのは、先行談話とのつながりを円滑にするために行われるものである。そのため、主語の位置の要素は、Discourse-old であることが求められるが、また一方で、不定名詞句に対しては、Discourse-new でなければならないという制約が課される。この相反する条件を満たすためには、不定名詞句の主語が、全体的には新しさを保持しつつ、部分的に Discourse-old であるような要素を含んでいれば良いということになる。このように考えれば、(20b) は、主語の位置に叙述名詞句が現れたために非文法的となった例ではなく、倒置の動機づけを欠くために不適切となった例であるといえる、と Mikkelsen は説明する。しかし、それでは、次の様な例はどのように説明すれば良いのであろうか。H and K が反論のために挙げた (24) の例を見よう。(24) の叙述名詞句は定冠詞を伴い、したがって、Discourse-old であることが明示されている。それにもかかわらず、(24a) を倒置した (24b) は容認不可能である。

(24) a. John is the one thing I have always wanted a man to be (that is, he's honest).

b.*The one thing I have always wanted a man to be is John. (H and K 1999: 379-380)

(24) は、指定文は倒置できないということを端的に表す例である、ということができるように思われる。

ここで注意しなければならないのは、ある文が倒置可能であるかどうかという点、その文が指定の機能をもつかどうかという点、そして、文頭の名詞句が叙述名詞句であるかどうかという点は、区別して論じる必要があるということである。いくつかのケースを考えてみよう。

まず、(25) の例を見てみよう。

(25) a. She is a nice woman, isn't she? Also a nice woman is our next guest. (Birner 1996: 43)

b. Our next guest is also a nice woman.

これは、確かに、不定名詞句が先行談話とのかかわりをもつ要素を含むために、文頭の位置で許容された例である。この不定名詞句は明らかに叙述名詞句である。そこで、(25a) の二番目の文は、倒置指定文である、ということになるであろうか。その答えは否である。この文は、どの人が、また、素敵な女性か、という問いに答えるものではない。非倒置形の (25b) は、*our next guest* を指示的名詞句と解釈するならば、その人の性質を叙述する措

定文と読むのが自然であろう。(26) も同様に、倒置によって文頭に叙述名詞句が現れた例である。倒置された形も、もとの形も、措定文と解釈するべきであろう。

(26) a. Not the least of Upali's enemies is Sri Lanka's prime minister, Ranasinghe Premadasa.
(Birner 1996: 43)

b. Sri Lanka's prime minister, Ranasinghe Premadasa, is not the least of Upali's enemies.
次に、(27) の例を取り上げよう。

(27) a. What I don't like about John is his tie.

b. His tie is what I don't like about John. (Higgins 1979: 79)

(27a) と (27b) は倒置の関係にある。そして、(27a)、(27b) は、「ジョンに関して気に入らない点は彼のしているネクタイだ / 彼のしているネクタイがジョンに関して気に入らない点だ」という指定の解釈をもつ。そこで、(27a) の主語名詞句は、叙述名詞句であるということになるであろうか。ここでも答えは否である。「ジョンに関して気に入らない点」は、彼のネクタイのもつ性質ではない。*what I don't like about John* は、変項名詞句と解釈されるものであり、叙述名詞句とは解釈できないものである。

今度は、先に見た (18) の例を、もう一度考えてみよう。Patten (2012) は、この文には指定の解釈はないとしている。これに対し、(28) では、不定名詞句に修飾語が加わったために、定名詞句同様、集合を限定することが可能となり、指定の解釈が出てくるという。

(28) There are several psychologists at St. Eligius. An especially talented psychologist is Dr. Hugh Beale. (Patten 2012: 54)

しかし、熊本 (2014) で示したように、(18) は、次のようなコンテキストにおいては、指定文と解釈することが可能である。(30) では、「が」が用いられていることに注意しよう。

(29) Which one is a surgeon?—JOHN is a surgeon.

(30) どの人が外科医か?—ジョンが外科医だ。 (熊本 2014 :7)

(18) の述語名詞句は叙述名詞句であり、そのままの形では倒置ができないが³、それにもかかわらず、指定文と解釈することが可能である。述語の位置の名詞句の「定性」の度合いによって、コピュラ文が指定の解釈をもちうるかどうかの違いが生じるという Patten の議論は、不十分なものであることがわかる。

以上、あるコピュラ文が倒置可能であったとしても、倒置した形が必ず倒置指定文と解釈されるわけではないこと、措定文は指定文と異なり、対応する倒置措定文のようなものは存在しないが、文体的倒置ということはあること、措定文に現れる叙述名詞句と (倒置) 指定文に現れる変項名詞句とは、区別しなければならないことを見てきた。倒置指定文を措定文の倒置形として分析する議論の根本的な問題は、指定の機能と措定の機能の区別が明確にされていないことである。そのため、それぞれのタイプの文に現れる名詞句の意味特性に注意を払わないまま、名詞句の定性や情報構造上の制約と関係づけて、語順を論じることになる。非指示的名詞句である不定名詞句がコピュラ文の主語の位置に現れた

例は、これまでに多く示されているが、それが倒置指定文であるのか、それとも、措定文の文体的倒置であるのか、どのように判断したらよいのであろうか。次節では、不定名詞句が主語の位置に現れ、倒置指定文と考えられる例を見ていくことにしよう。

Ⅲ. 不定名詞句を主語とする倒置指定文

良く知られているように、Higgins (1979)は、倒置指定文の主語名詞句がもつ、リストの見出しとしての機能に注目し、それを *superscriptional NP* として分類した。

(31) a. What I bought was a punnet of strawberries and a pint of clotted cream.

b. I bought the following things: a punnet of strawberries and a pint of clotted cream.

(Higgins 1979: 154)

superscriptional NP は、非指示的な名詞句であり、いくつかの類似点も示唆はされるものの、措定文の述語位置に現れる *predicational NP* とは、明確に区別されている。措定文がトピックを導入し、それについて何かを述べるはたらきをするのに対し、指定文は変項を埋める値を指定するはたらきをもつものであって、ある指示対象に「ついて」(‘about’) の記述を行うものではない、という Higgins の指摘は重要である。

Higgins は、WH 分裂文に加えて、定名詞句を主語とする倒置指定文を論じているが、不定名詞句が主語の位置に現れた例については、詳しく述べていない。しかしながら、(32)、(33) の例を挙げ、不定名詞句が倒置指定文の主語の位置に現れて *superscriptional NP* として機能する可能性に対しては、否定的な見方を示している。

(32) *A man I met yesterday was Jack Jones.

(33) *A thing they bought was a new car.

(Higgins 1979: 224)

その一方で、例外的に倒置指定文と解釈できるものあるとして、(34) の例を挙げる。

(34) An approach that you might try with him is admitting yourself to be in the wrong.

(Higgins 1979: 280)

また、Higgins は、*one* によって導かれる NP と、コピュラ文の指定の機能との関連に言及し、(32)、(33) においても、*a* の代わりに *one* を用いれば、文法的になるという判断を示している。次の例は、倒置指定文と解釈できる例として挙げられているものである。

(35) One charge that he would not admit was that of having perjured himself in the earlier trial.

(Higgins 1979: 143)

(36) He made two suspicious claims. One was that he hadn't told them and the other (was) that he had hidden it.

(Higgins 1979: 145)

この、*one* によって導かれる NP と *a* によって導かれる NP の違いについては、Partee (2000) が興味深い観察を行っている。*one friend of mine* が *superscriptional NP* の機能をもつ

のに対し、*a friend of mine* にはその機能がないことに注目し、次の例を挙げて、Partee は、superscriptional NP と predicaitional NP の分布が異なることを指摘する。

- (37) a. One friend of mine is my old friend Beth.
b. *?A friend of mine is my old friend Beth.
c. *?My old friend Beth is one friend of mine.
d. #My old friend Beth is a friend of mine. [redundant] (Partee 2000: 202)

(37a) が自然な倒置指定文であるのに対し、(37b) は、容認不可能である。(37a) の語順を逆にした (37c) は、指定文として解釈することが可能でないのであれば、容認不可能である。(37d) は、文法的には全く問題がないが、冗長であり、奇妙な措定文となる。また、(37d) は、指定文として読むことはできない。こうした Partee の判断は、superscriptional NP と predicaitional NP を区別することの重要性を示しているといえよう。

以上、不定名詞句が主語の位置に現れ、その名詞句を含むコピュラ文が倒置指定文と解釈され、その名詞句が叙述名詞句とは性格を異にするものであることが明らかな例を見てきた。先に見たように、措定文でも、先行談話との関わりを示す要素が含まれる場合には文体上の倒置が可能であるとする、措定文の倒置形と倒置指定文の区別を明確に示すためには、何か手がかりが必要となる。*one* や、それと呼応する *another* などが叙述名詞句として機能しにくいことは理解できるとしても、主語の位置の名詞句が叙述名詞句であるのか、superscriptional NP、あるいは変項名詞句であるのか、見分ける方法があるであろうか。次節では、*be* 動詞の数が、前後の名詞句のどちらの数に一致するかという観点から、措定文の倒置形と倒置指定文の相違について考えてみることにしたい。

IV. 前後の名詞句の数と *be* 動詞の数の一致

Birner (1996) が、PP、VP、AP、AdvP の倒置の場合と同様、NP⁴ 倒置において前置された要素は非項位置にあると想定するのに対し、Mikkelsen (2005) は、それは主語の位置にあると考える。その証拠の一つは、*be* 動詞の数が、前置された名詞句の数に一致することである。

- (38) The Prime Minister and the Minister of Defense in the 1992 Labour government were
(both) Yitzhak Rabin. (Mikkelsen 2005: 137)

もう一つの証拠は、文頭の名詞句が倒置されて、yes-no 疑問文を作ることができることである。(39) と (40) を比較してみよう。

- (39) Were the Prime Minister and the Minister of Defense in the 1992 Labour government
(both) Yitzhak Rabin? (Mikkelsen 2005: 137)

- (40) *Was more impressive to you Tom Conti in the thankless role of Mr. Laurence, the audience's alter ego? (Mikkelsen 2005: 137)

(38) は、倒置指定文と解釈される文であり、このような例は、Mikkelsen がいうとおり、主語位置への倒置と考えて良いように思われる。しかしながら、NP 倒置の中には、Heycock (2012) が示すように、名詞句が非項位置へと倒置されたものと考えなければならない例もある。

- (41) Delinquency is a threat to our society. Also a threat are / *is factory closing and house repossessions.

- (42) *{ Are / Is } also a threat to society factory closing? (Heycock 2012: 220)

Mikkelsen が、すべての NP 倒置において、前置された名詞句は主語の位置にあると考えているのか、それとも、NP 倒置の中には、非項位置への倒置が行われるものもあると考えているのか、実はあまり明確ではない。一方では、NP 倒置と他の句範疇の倒置との違いを、前置された要素が主語位置にあるかどうかという点に求めながら、もう一方では、前置された要素はあくまでも叙述名詞句であるという主張の裏づけを、先に見た (25a)、(26a) のような、非項位置への倒置と考えられる構文との類似性に求めている。倒置指定文は、主語位置への倒置という点で特殊性をもつ倒置構文であるという指摘はあっても、倒置指定文と措定文の文体的倒置との区別は、不明瞭なままに残されている。

上で、倒置指定文の *be* 動詞の数は、文頭の名詞句の数に一致するという主張を取り上げたが、実際には、*be* 動詞の後の名詞句の数と一致している例も多く見られる。Juil (1975)、Jacobsson (1990) には、次のような興味深い例が示されている。

- (43) Two other factors contribute to making the book difficult. The first—one of presentation—are the enormous footnotes which appear on almost every page, sometimes taking up the greater part of it....The second drawback is the lack of personalia. (Juil 1975: 137)

- (44) Arthur felt as if he were coming out of a dream, and the first thing he noticed were his cold feet. (Jacobsson 1990: 38)

- (45) Another good thing are the evening classes which you can do some nights. (Jacobsson 1990: 37)

- (46) All that was left were parts of the walls and the eternally irreparable. (Jacobsson 1990: 51)

Jacobsson は、われわれの倒置指定文を等価文とみなし、次の様な観察を行っている。等価文において、コピュラの前の NP₁、後の NP₂、どちらも単数である場合、どちらも複数である場合、また、NP₁ が複数である場合には、数の一致は NP₁ が決定し、NP₁ が単数、NP₂ が複数である場合には、NP₂ の数に一致させることが可能である、という観察である。また、*be* 動詞の数が NP₂ の数に一致する場合の特徴として、NP₂ の方が NP₁ より指示的であり特定のであるという意味で、より「主語」的である、という点を挙げている。

ここでは NP₁ と NP₂ のいずれが主語であるかという問題はおくとして、(38) の例も、(43)-(46) の例も、倒置指定文の意味特性を考えれば、説明が可能であるということを指摘しておきたい。(43)-(46) は、一つの変項に対して、複数の値が指定された例である。この場合は、値の方に注目して、*be* 動詞の数の一致が行われていると考えることができる。これに対し、(38) は、複数の存在する変項の方に注目して、数の一致が行われた例である。(38) の倒置指定文の読みは、日本語では (47) のように示すことができるであろう。(38) では (48) と (49) に対応する二つの指定が行われており、[*x is the Prime Minister in the 1992 Labour government*] の *x* を埋める値と、[*x is the Minister of Defense in the 1992 Labour government*] の *x* を埋める値の両方を、‘Yitzhak Rabin’で指定しているのである。

(47) 1992 年の労働党政府の首相と国防相はイザック・ラビンだ。

(48) 1992 年の労働党政府の首相はイザック・ラビンだ。/ イザック・ラビンが 1992 年の労働党政府の首相だ。

(49) 1992 年の労働党政府の国防相はイザック・ラビンだ。/ イザック・ラビンが 1992 年の労働党政府の国防相だ。

ここで、(47) と (50) の違いに注意しよう。複数の叙述名詞句を結ぶ連言には「と」ではなく「で」が用いられることが知られている (cf. 西山 2003)。⁵ もし、(38) の主語の位置の二つの名詞句が叙述名詞句であれば、それをつなぐためには「で」が用いられなければならない。しかし、(50) は、容認できないものである。

(50) *? 1992 の年労働党政府の首相で国防相はイザック・ラビンだ。⁶

変項名詞句が叙述名詞句とは区別されるべきものであることは、こうした例からも分かるであろう。

本節では、*be* 動詞の数が、その前後の名詞句のいずれの数と一致するかということが、必ずしも、倒置指定文と指定文の文体的倒置の区別の手がかりにはならないことを見た。次節では、「焦点」という観点から、倒置指定文と倒置構文の相違点を探ることにしたい。

V. 倒置指定文の焦点と倒置構文の焦点

倒置指定文と指定文の文体的倒置は、いずれも、述語の位置の名詞句に焦点が置かれるという点では類似している。このことが、両者の違いを分かりにくくしているのであるが、それぞれに対して用いられる焦点の概念には、違いがあると思われる (cf. 熊本 2000、2006)。ここでは、NP 倒置以外の倒置構文も考察の対象とし、倒置構文の焦点がもつといわれる機能 (談話において際立っているか、あるいは推測可能であるような *open proposition* の変項の例示を行うという機能) (Prince 1986) と、倒置指定文の焦点がもつ機能 (変項を埋める値を指定するという機能) とを比較してみよう。

Declerck (1988) は、(51) について、対応する ‘x, y and z will be needed’ の語順の文は指定の解釈をもちうるが、倒置された形は、指定の解釈しか持たないと述べている。

- (51) Needed will be an adjustment of academic calendars and schedules, effective combination of classroom requirements with independent study, and liberal recognition of the mature students’ practical experience. (Declerck 1988: 6)

また、Birner and Ward (以下 B and W) (1998) は、倒置構文に現れる *be* 動詞は、何ら新しい情報を加えず、コロンほどの意味しかないとして、(52a)、(53a) を、(52b)、(53b) と言い換えている。

- (52) a. The most visually enticing selection is the chocolate “delice” : a hatbox-shaped dessert made of dark chocolate and filled with berries and white chocolate mousse. Surrounding the creation is a mosaic of four fruit sauces.
b. Surrounding the creation: a mosaic of four fruit sauces. (B and W 1998: 189-190)
- (53) a. An excellent appetizer is the squab ravioli with garlic sauce.
b. An excellent appetizer: the squab ravioli with garlic sauce. (B and W 1998: 190)

この言い換えは、先に見た、倒置指定文のリストの機能を想起させるものである。確かに、(51)、(52a)、(53a) において、後置された要素に強調が置かれているということは認めるとしても、これらの文は指定の機能をもつと考えて良いかどうかについては、疑問が残る。それでは、倒置構文の情報構造は、OP の概念を用いた場合に、どのように説明されるのであろうか。

B and W は、Prince (1986) に従い、OP を次のように定義する。

- (54) An open proposition is a proposition containing one or more variables, and represents what is assumed by the speaker to be salient (or, we will argue, inferable) in the discourse at the time of utterance. The OP is obtained by replacing the ‘tonically stressed constituent’ of the utterance with a variable whose instantiation corresponds to the new information, or focus, of the utterance. (B and W 1998: 12-13)

この規定から明らかなように、OP というのは語用論的な概念である。Prince は、OP をマークする構文として、話題化、動詞句前置、副詞句前置、WH 分裂文などと共に、*it* 分裂文を論じているが、いわゆる *informative presupposition it-cleft*⁷ は、OP をマークするものではないと述べている。同様に倒置指定文と解釈される *it* 分裂文の中に区別を設けるということは、OP が、文の意味構造ではなく、共有の知識に対する話し手の想定に関わるものであることを示している。指示的名詞句、叙述名詞句、変項名詞句の区別は、名詞句の文における意味機能上の区別であること、指定文、(倒置) 指定文は、こうした名詞句の意味機能にもとづいて規定されること、変項名詞句はその意味特性として変項を含んでいることを考えれば、OP のような談話上の概念は、指定文、(倒置) 指定文といった文タイプ

自体の区別に寄与するものではなく、談話の流れの適切性を説明するものであるとみなすのが妥当であろう。

さて、B and W によれば、(55) の OP と焦点は、(56) のように示すことができるという。

(55) Two CBS crewmen were wounded by shrapnel yesterday in Souk el Gharb during a Druse rocket attack on Lebanese troops.

They were the 5th and 6th television-news crewmen to be wounded in Lebanon this month. One television reporter, Clark Todd of Canada, was killed earlier this month.

Wounded yesterday were cameraman Alain Debos, 45, and soundman Nick Follows, 24.

(B and W 1998: 236)

(56) a. OP = X was wounded at {injury times}, where X is a member of the poset ⁸ {television-news crewmen}.

b. Focus = cameraman Alain Debos, 45, and soundman Nick Follows, 24.

(B and W 1998: 237)

(55) では、先行談話の情報から、時間の順序、負傷や死といった損傷、CBS の関係者などが想起され、その関連の上に、新情報が焦点として導入されている。OP というのは、今後与えられる情報を予想する根拠のようなものと考えて良いであろう。ここで、(55) の倒置構文は、たしかに、期待される新情報を文末で提示し、そこに注意を向ける機能をもつとしても、「昨日、45 歳のカメラマン Alain Debos と 24 歳の音響係 Nick Follows が負傷した」という状況全体を記述する文である点に注意しよう (熊本 2006)。これは、(57) の倒置指定文が、*be* 動詞の後の要素の指示対象によって *be* 動詞の前の要素が示す変項の値を埋めるという形をとり、「昨日、負傷したのはだれか」という問いと「45 歳のカメラマン Alain Debos と 24 歳の音響係 Nick Follows だ」という答えを分離して示しているのとは、大きく異なる。

(57) The ones who were wounded yesterday were cameraman Alain Debos, 45, and soundman Nick Follows, 24.

同じような違いは、先に見た措定文の文体的倒置 ⁹ (25a)、(26a) と、不定名詞句を主語とする倒置指定文 (34)、(35)、(36) の間にも、見て取ることができる。

倒置構文における焦点は、ある想定のもとに新たな要素が導入されるという点で、文中の他の情報との関係において際立ちをもつものである。他方、倒置指定文における焦点は、問いに対する答えとして選ばれたという点で、他の答との関係において注目されるものである。こうした違いは、措定文の倒置形と、不定名詞句を主語とする倒置指定文とを別個の構文として区別するための、十分な根拠となると思われる。

VI. 結語

本稿では、倒置指定文を措定文の倒置形とみなす Mikkelsen (2005)、Patten (2012) の議論の問題点を探るため、(倒置) 指定文と措定文の意味構造、変項名詞句と叙述名詞句の意味機能が異なることを確認し、英語の不定名詞句を主語とする倒置指定文と、文頭に不定名詞句が現れた措定文の倒置形は、意味論的、語用論的に異なる特性をもつことを示した。同じ名詞句が叙述詞句を表すためにも変項名詞句を表すためにも用いられることがあり、また、英語には日本語の「が」と「は」に対応する標識がないため、示された例文において、措定と指定のどちらの解釈が意図されているのか、明確でない場合も多い。実際、Mikkelsen、Patten は、不定名詞句を主語とする倒置指定文と措定文の文体的倒置を区別せずに、議論を行っている。両者を識別する手がかりについては不明な点も多く、今後、詳細に検討する必要があると思われる。大切なのは、倒置して倒置指定文になるのは指定文であり、措定文を倒置しても、それは措定文の文体的倒置であって、決して倒置指定文にはならないということを理解することである。

倒置指定文の主語名詞句は変項名詞句であると主張する立場からは、不定名詞句も変項名詞句として機能するという点を、証拠立てて説明する必要がある。変項名詞句と潜伏疑問文に現れる名詞句の間には関連性があることが指摘されてきたが (西山 2003、2013)、確かに、不定名詞句にも潜伏疑問の解釈が生じることを、Frana (2010) は示している。不定名詞句に変項名詞句としての意味機能を認める場合、それを具体的にどのような形で表示するかという点は、注意深く検討する必要がある問題である。

日本語のコピュラ文の意味構造、名詞句の意味機能に関しては、これまでに多くのことが明らかにされてきた。こうした知見を英語のコピュラ文の考察に生かすことは、意義深いことであると思われる。種々の問題が残されたが、その考察は、別稿に譲ることとした。

*本研究は、平成 26 年度日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究 (C)「焦点化構文の意味機能に関する研究」(課題番号: 24520433) (研究代表者: 熊本千明) の助成を受けたものである。また、この論考は、第 59 回慶應意味論・語用論研究会 (2014 年 11 月 1 日 於: 慶應義塾大学) における口頭発表に加筆、修正を加えたものである。有益な助言を下さった出席者の方々、例文のチェックをして下さった Gregory K. Jember 氏に謝意を表す。

註

1. ここでは、主語の位置に変項を表す名詞句が現れる形を、「倒置指定文」と呼ぶことにする。引用した著作の筆者の用語に特に注意を向ける場合には、使用されている用語をそのまま用いることもある。語順にかかわらず、機能、解釈を問題にする場合は、「指定」の語を用いる。

2. 様々なタイプのコピュラ文の意味機能を明確に区別することよりも、コピュラ文のタクソノミーの簡略化という利点に注意が向けられる。
3. これを倒置すると、「外科医なのはジョンだ」という、分裂文の形をとることになる。そのままの形で倒置指定文の主語位置に現れる「変項名詞句」とは区別されるべきである（西山：個人談話）が、その扱いについては、さらに検討が必要であると思われる。
4. Mikkelsen (2005) の用語では、NP ではなく、DP である。
5. 西山 (2003) には、叙述名詞句と指示的名詞句の結合の違いを示すために、次の例が挙げられている。叙述名詞句の連言には、「で」が用いられるが、
 - (i) a. ?洋子は、金持ちと天才だ。
 - b. 洋子は、金持ちで天才だ。 (西山 2003: 126)
 指示的名詞句の連言には、「と」が用いられる。
 - (ii) 政治家とピアニストは金持ちだ。 (西山 2003: 127)
 変項名詞句の連言については、明言がなされていないようである。
6. 次の形は、容認可能である。この場合は、一つの変項名詞句の中に、性質を表わす二つの名詞句の連言が現れていると考えることができる。
 - (i) 1992 年に労働党政府の首相で国防相だったのはイザック・ラビンだ。
7. *that* 節内で示される情報は前提とされておらず、新情報であるものを、周知の事実であるかのよう述べるタイプの *it* 分裂文である。
 - (i) The leaders of the militant homophile movement in America generally have been young people. *It was they who fought back during a violent police raid on a Greenwich Village bar in 1969, an incident from which many gays date the birth of the modern crusade for homosexual rights.* (Prince 1986: 7)
8. 順序関係（大小関係、包含関係、優先関係等）が定義された集合が順序集合である。順序づけができない要素対がある場合、その順序集合を、半順序集合（partially ordered set, poset）という。Birner and Ward (1998) は、現在の発話で提示される情報と既に喚起された情報とのつながりは、poset の関係によって示すことができると考える。例えば、焦点化が適切なのは、前置される entity と既に喚起された entity との間に、set / subset、part / whole、identity などの関係がある場合であるという。
9. 不定名詞句が文頭に現れた指定文の文体的倒置は、提示文（熊本 2000、2006）の一種と考えて良いと思われる。

参考文献

- Birner, Betty J. (1996) *The Discourse Function of Inversion in English*. New York: Garland Publishing.
- Birner, Betty J. and Gregory Ward (1998) *Information Status and Noncanonical Word Order in English*. Amsterdam: John Benjamins.
- Declerck, Renaat (1988) *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-Clefts*. Leuven: Leuven University Press.
- Frana, Ilaria (2010) *Concealed Questions. In Search of Answers*. Doctoral Dissertation, University of Massachusetts Amherst.

- Heller, Daphna (2005) *Identity and Information: Semantic and Pragmatic Aspects of Specificational Sentences*. Ph. D. diss., The State University of New Jersey.
- Heycock, Caroline and Anthony Krock (1999) "Pseudocleft connectedness: Implications for the LF interface level," *Linguistic Inquiry* 30 (3): 365-397.
- Heycock, Caroline (2012) "Specification, equation, and agreement in copular sentences," *Canadian Journal of Linguistics* 57 (2): 209-240.
- Higgins, F. Roger (1979) *The Pseudo-cleft Construction in English*. New York: Garland Publishing.
- Jacobsson, Bengt (1990) "Subject-verb concord in equative sentences in English." *Studia Linguistica* 44 (1): 30-58.
- Juul, Arne (1975) *On Concord of Number in Modern English*. Copenhagen: Nova.
- 熊本千明 (2000) 「指定文と提示文」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』5 (1) 81-107.
- 熊本千明 (2006) 「指定文と提示文の特徴について」『佐賀大学文化教育学部研究論文集』10 (2): 117-129.
- 熊本千明 (2014) 「指定文・措定文・同一性文」『佐賀大学全学教育機構紀要』2: 1-13.
- Mikkelsen, Line (2005) *Copular Clauses*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.
- Moro, Andrea (1997) *The Raising of Predicates: Predicative Noun Phrases and the Theory of Clause Structure*. Cambridge: Cambridge University Press.
- 西山佑司 (1988) 「指示的名詞句と非指示的名詞句」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』20: 115-136.
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論』東京: ひつじ書房.
- 西山佑司・編著 (2013) 『名詞句の世界』東京: ひつじ書房.
- Partee, Barbara H. (2000) "Copula inversion puzzles in English and Russian." In Kiyomi Kusumoto and Elisabeth Villalta (eds), *UMOP 23: Issues in Semantics and Its Interface*. University of Massachusetts, Amherst: GLSA, 198-208.
- Patten, Amanda L. (2012) *The English It-Cleft: A Constructional Account and a Diachronic Investigation*. Berlin / Boston: De Gruyter Mouton.
- Prince, Ellen F. (1986) "On the syntactic marking of presupposed open proposition." In Farley, A., Farley P., and McCullough, K.-E. (eds.) *Papers from the Parasession on Pragmatics and Grammatical Theory*, 22nd Regional Meeting, Chicago Linguistics Society, 208-222.